

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02020

研究課題名（和文）東南アジア大陸部におけるグローバル化と「地方的世界」の再編 タイを中心にして

研究課題名（英文）Globalization and Reformation of 'Local World' in Mainland Southeast Asia: with a focus on Thailand

研究代表者

藤井 勝 (FUJII, Masaru)

神戸大学・人文学研究科・名誉教授

研究者番号：20165343

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、2010年代のグローバル化のもとで、とくにタイの「地方的世界」の内部構造がいかに変化・変容したかを実証的に解明した。同時に近隣国、とくにミャンマーの研究も行うことを通じて、東南アジア大陸部の「地方的世界」を横断的に比較研究するアプローチを新たに創出した。さらに、新型コロナウイルスのパンデミック、ミャンマーの政変、ロシアのウクライナ侵略といった、グローバル化の修正や問い直しに関わる事態がこの間に連続的に発生したことを踏まえて研究の立脚点を再検討し、今後の研究課題等を明確にした。これらの成果に基づき、研究の一層の推進を図るべく科研費を新たに申請し、令和5年度に採択された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究代表者は、10数年以前に科研費（基盤研究A）によって東アジア全体（東北アジアと東南アジアよりなる）の「地方的世界」の伝統や変動を研究し、『東アジア「地方的世界」の社会学』（藤井・高井・小林編、晃洋書房、2013）などの成果を著したが、その後グローバル化は一段と進行した。その中で、本研究がタイや東南アジア大陸部の研究を通じて新局面を明らかにしたことは意義がある。さらに、東南アジア大陸部の地方社会を横断的に比較研究するためのアプローチや、「ポスト・グローバルと『地方世界』」という視座転換を提示できたことは、今後の研究の推進にとって意義があるとともに、地方社会の新たな発展にも寄与できる。

研究成果の概要（英文）： This research has empirically revealed about changes of the internal structure of "local world" particularly in Thailand under globalization during 2010s. With conducting surveys on the neighboring countries, particularly Myanmar, it has also created a new approach for comparative study of "local world" over Mainland Southeast Asia. Furthermore, it has reviewed about present research grounds, and clarified future research agendas and so forth in the light of recent continuous occurrences which are connected with modification and re-evaluation of globalization, that is, COVID-19 pandemic, the political turmoil in Myanmar, and Russian invasion of Ukraine. On the basis of these achievements, the representative of this research applied for Grants-in-Aid for Scientific Research (KAKENHI): Scientific Research B to promote a new project, which has been adopted in FY 2023.

研究分野：社会学

キーワード：地方 地域社会 東南アジア大陸部 基層社会 グローバル化 社会学 タイ ミャンマー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は、東アジア（東北アジアと東南アジアからなる）の地方社会の研究を推進してきた。基盤研究 B「21 世紀東アジアにおける農村—都市関係の再編に関する研究」(2003-2006、JP15402008、研究代表者 2003-2004)、それに続く基盤研究 A「東アジアにおける『地方的世界』の基層・動態・持続可能な発展に関する研究」(2007-2010、JP19252002、研究代表者)である。後者では、村落（農村）—地方小都市(町) の関係を内包する地方社会を「地方的世界」という概念の下に捉え、研究を進めた。その成果は藤井勝・高井康弘・小林和美編『東アジア「地方的世界」の社会学』(2013、晃洋書房)などに著された。基盤研究 B「現代東アジアにおける国際結婚と『地方的世界』の再構築」(2013-2016、JP25301010、研究代表者)では、「地方的世界」という観点から国際結婚を研究した。その成果は、藤井勝・平井晶子編『外国人移住者と「地方的世界」：東アジアにみる国際結婚の構造と機能』(2019、昭和堂)などに著された。

(2) しかし、その後の社会の展開によって、「地方的世界」の研究のさらなる展開が必要になった。とくに基盤研究 A による研究を実施して以降、グローバル化がますます拡大・深化したことである。たとえば、基盤研究 A のなかで開催した国際研究集会で、招聘したミャンマー人研究者は講演の中でミャンマーの民主化のロードマップについて言及した。この時、会場からはかなり懐疑的な意見も出されたが、実際にはその直後より、長らく閉鎖的政治体制を維持してきた軍部が主導して開放と民主化のプロセスが進み、それに合わせて経済・社会・文化におけるグローバル化が一挙に押し寄せ、ミャンマーの地方社会も大きく変化した。

## 2. 研究の目的

(1) 以上のように、2010 年代におけるグローバル化の一段の拡大・深化のなかで地方社会がいかに変化・発展するかは、大きな研究のテーマとなる。現代のグローバル化の指標の 1 つとなるスマートフォンの普及も 2010 年代のことである。したがって、本研究は、前掲の基盤研究 A 以降の時期、つまり 2010 年代を中心とする時期における「地方的世界」の解明を目的とした。

(2) もっとも本研究は、東南アジア大陸部、とくにタイを主な対象とした。研究代表者自身のフィールドであるタイを中心に据えながら研究課題を追究するのが適当と考えたからである。しかもタイでは、2000 年代から続く、政権をめぐる深刻な対立・混乱にもかかわらず、ムーバーン（日本の「自然村」=村落に相当）の上位の地域社会であるタムボン（日本の「行政村」に相当）に新設されたタムボン自治体(ongkaan borihan suan tambon)が勢いを増し、「地方的世界」の構造が変化したからである。したがって、タイに関する考察を出発としながら、東南アジア大陸部の他の社会との比較も行い、この地域全体への認識を深めることを目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) タイにおける歴史的な存在としてのムアンは、19 世紀末から 20 世紀初頭のチャクリー改革によって廃止され、近代の行政組織であるアムプーやチャンワットに継承されてきた。前者は小ムアンの、後者は大ムアンの伝統に立つ。大ムアンは周囲の複数の小ムアンを統合して地域を代表したが、同じようにチャンワットは複数のアムプーを内部に統合している。たとえば東北部のチャンワットの 1 つであるヤソートンでは、1929 年に葬儀本として刊行された『イサーン地方王朝年代記 プラ・スントンラーチャデート (ケー・パトゥムチャート) 版』(พงศาวดารภาคอีสานฉบับของพระสุนทรราชดศา(เจ้าประทุมชาติ) が 2021 年に関係部署によって復刻された。この年代記は「イサーン地方」という名をタイトルに含むが、ムアン・ヤソートンを中心に記された年代記である。復刻版の序文では、この年代記は「過去の国 [บ้านเมือง] の来歴について承知しておくことを助け、チャンワット・ヤソートンの人々が継承すべき遺産」だから復刻したと記されている。

(2) 日本の研究では、アムプーを郡、チャンワットを県と訳すことが定着しているので、本研究もこれを踏襲する。そして、後述のように、アムプー（郡）は基礎となる「地方的世界」であるので、アムプー（郡）を主な研究対象とする。その内部は複数のタムボン（村落連合体）から構成され、さらに各タムボンは複数のムーバーン（村落）より構成されている。したがって、このアムプー—タムボン—ムーバーンの関係構造、そしてタムボンの範域に編成され、その長や議員が住民選挙に選出されるタムボン自治体の特質にとくに注目した。

(3) タイ全体の郡を網羅的には調査できないので、事例研究を行った。タイ東北部のマハーサーラーム県チュンユーン郡と、中部のナコーンパトゥム県ナコーンチャイシー郡である。タムボンとしては、チュンユーン郡はタムボン N、ナコーンチャイシー郡はタムボン W である。また比較のため、主にミャンマーのシャン州タウンジー県ホーボン郡を事例として調査研究した。

(4) 本研究は当初、おもに現地調査によって研究目的を達成する計画だったが、研究期間中に

新型コロナウイルスのパンデミック、またミャンマーの政変などが相次いで生じたことによって、現地調査の実施が困難になった。このため研究期間を当初の予定から2年間延長するとともに、必要に応じて研究方法を修正しながら、研究課題を追究した。

#### 4. 研究成果

(1) タイの「地方的世界」について、以下のようなことが明らかになった。

①アムプー（郡）内のグローバル化は確実に進行している。バンコク圏周辺に位置するナコーンチャイシー郡だけでなく、東北部のチェンユーン郡のような、経済的な後進地域も例外ではない。それを象徴するのが、大手スーパーのロータスがチェンユーン郡の中心町に進出していることである。約10年前までは、大手の郊外型スーパーマーケットは県庁所在地に1カ所ある程度だったが、いまやその先の郡社会にまで進出している。そこでは、日本の大規模スーパーマーケットと同じく、グローバル市場で流通する商品が店の棚に並ぶ。地元の生活水準からみると商品の価格はかなり高いが、地元の人々が車で来店する。またガソリンスタンドをレストランやコーヒーショップと複合させた郊外型店舗なども進出している。スマートフォンに限らず、グローバルな消費や生活のスタイルが急速に浸透している。

②まず、郡の政治行政の中心であるアムプー（郡）役場は、旧態依然であるように見える。東北部でも中部でも大幅な庁舎の改修や拡張は進んでいない。もちろんコンピュータなどの機器の導入は進んでいるが、オフィスは旧来のスタイルで運営され、職員数も増加していない。かつて郡役場は地方社会のなかで際立つ存在であったが、社会変化のなかでその立場が相対的に低下しているように思われる。このような状況は、グローバル化のもとで地方社会が非権威主義化や民主化しつつあることを反映したものと言えよう。一方、タムボン、とくにタムボン自治体は隆盛している。郡役場にはHPがないが、タムボン自治体は国の用意したサイトでHPを立ち上げ、管理・運営している。タムボンの社会的露出度、情報発信はそれだけ大きい。研究代表者は2000年に始めてタムボンN自治体事務所を訪問・調査したが、その時と比べて、事務所の施設は大規模に増設されるとともに、その活動も拡大し、職員も増えている。一方、ナコーンチャイシー郡のタムボンW自治体事務所は1997年に開所したものが（赤木・北原・竹内編『続・タイ農村の構造と変動』勁草書房、2000年、387頁）、大きな拡張もなく現在も使用されているが、以下にも示されるように、勢いは十分にある。

③タムボンのあり方には歴史的文化的な条件も影響する。タイでは、一般には「1村落1寺」という傾向があり、事実、チェンユーン郡（東北）でもこの傾向が見られる（ただし東北部では、元の村落を行政的に複数の村落に分割した場合、寺は元の村落単位で存在することが多い）。しかしナコーンチャイシー郡では、タムボンの範囲に1つの寺が形成されるのがむしろ一般的である（1タムボン2寺である場合は、タムユット派寺院があとで加わった場合が多い）。これらの寺は、地元内外から参拝者や信者を数多く集めるような宗教行為・活動を積極的に展開しているために、地元への経済効果が大きい。参拝者や信者が地域内で行う消費を促し、地元の人々の就業機会も拡大するからである。そこでは村落を越えた、タムボンという単位での人々の共同や連携が歴史的に強いので、タムボン自治体の機能強化もより容易に進むであろう。

④タムボンNでは、かつてはカムナン（元々のタムボン長。郡長—タムボン長—村落長の序列がある）を勤めた人物が横滑りしてタムボン自治体の長を勤めており、年齢も70歳を越える（従来の郡長、タムボン長、村落長には公務員の60歳定年制が適用されるが、選挙で選ばれるタムボン自治体の長や議員には定年制がない）。カムナンが定年後にタムボン自治体長になるというキャリアパスでは、古い組織体質が温存されやすいであろう。これに対して、タムボンW（中部）自治体の長はまだ壮年である。父親はタムボンWのカムナン経験者だったそうだから、地元の有力家系出身ではあるが、本人は若い頃は村外でビジネスに携わり、地元での役職経験はないと言う。ちなみに、タムボンWのカムナンは30歳代とのことである（現在のカムナンは選挙ではなく、村落長の互選によって選出される）。つまり東北部と比べて、地域役職者の若年化が大いに進んでいる。その点において、中部のタムボンでは、グローバル化を反映した「地方的世界」の内部構造の変容がより進行していると言える。

⑤タムボン自治体の存在は、隣国であるラオスにも影響を与えている。ラオスでは、前出の基盤研究Aで現地調査を行っている時期には、タイのタムボンに相当する地域社会の組織化は顕著には見られなかった。しかしながら、その後クムバーンという中間の地域社会が設立され、現在は全国に広く普及している。もちろんラオスにも、伝統的にはターセーンという村落の連合体があった。ターセーンはもともとラオ族社会における地域の役職者名の1つで、タイ東北部にもかつて存在した（『様々な慣習・習俗について 第一部：イサーン地方の民の慣習・習俗 第2刷』[เรื่องลัทธิธรรมเนียมต่าง ๆ ภาคที่ ๑ ลัทธิธรรมเนียมรายภูมิภาคอีสาน พิมพ์ครั้งที่สอง] 1937年、26頁）。村落連合体に相当する地域単位の長を指したが、同時にその長が管轄する地域もターセーンと呼ばれた。この伝統の上に今日のクムバーンは成り立つと考えられるが、2010年代から本格的に再結成されたのは、タイのタムボン自治体に注目したからであり、地方社会のグローバル化の動きとも合致する。

⑥タイにおけるタムボンの隆盛は、アムプー（郡）やムーバーン（村落）の存在をそれだけ希薄にする可能性もある。例えば、日本では、近世期までは制度的機能が弱まっていた郡を明治政府は政治行政単位として再興し、郡役場を中心に郡社会が確立したものの、その後の近代化の進展のなかで市町村の制度的位置づけが強化され、郡は政治行政上の機能を失った。実際、現在タイでは、複数のタムボン自治体を統合して財政基盤を強化し、より自治機能の強い町自治体（テ

ーサバーン・タムボン)に昇格させるという動きもある。しかしながら、たとえ政治行政的機能は低下しても、郡社会は維持されるのではなかろうか。そもそもタムボン自治体は郡役場の監督のもとに機能している。郊外型のスーパーマーケットの進出に見られるように、郡中心町は経済中心地として十分に機能している。さらに地方における医療福祉の増進のなかで、郡病院の存在は大きくなっている。郡社会が内包する多様な機能を十分に保持するかがり、また人々が郡社会にムアンの伝統を重ねているかがり、それは「地方的世界」として存在するであろう。

(2) ミャンマーのホーボン郡の調査研究を通じて、以下のことが明らかになった。

①タイではムーバーンタムボンーアムプーが村落—村落連合体—郡に対応するが、ミャンマーではチェューユワー—チェューユワー・オウッス—ミョーネーがそれに対応する(カナ表記は、高橋昭雄『ミャンマーの体制転換と農村の社会経済史 1986-2019』東京大学出版会、2021、32-33頁のものを使用)。ミャンマーの特徴は、a)イギリス植民地時代から今日まで、村落ではなく村落連合体(チェューユワー・オウッス)が行政上の末端単位として機能してきたこと、b)カヤイン(県)以上にミョーネー(郡)の存在が大きいことである。しかも、2010年代からのミャンマーの民主化にあわせて、チェューユワー・オウッスの運営の民主化がすすみ、その長の選出も透明化されることにより(同上、39-40頁)、いわばタムボン自治体により近い姿になりつつある。

②ミャンマーはタイ以上に多民族的であるから、「地方的世界」と民族の関係も重要となる。シャン州自身はシャン族(ミャンマーにおけるタイ族グループ)人口が支配的であるが、タウンジー県内はパオ族とシャン族が全体を2分するかたちで居住し、ホーボン郡はパオ族人口が支配的地域である。このなかでパオ族は、ホーボン郡を含む3郡より構成される民族自治区を2010年より形成している。またパオ民族自治区本部庁舎はホーボン郡に立地している。パオ族自治区といってもパオ族は人口の7割程度と言われており、シャン族、ミャンマー族などの民族を内包する。農山村部は相対的にパオ族人口が多いが、ホーボンの町などではその他の民族の比重が高まる。一方、山地にはパオ族の村落の周辺にリス族などの少数民族の村落が点在している。民族自治区といっても実態は多様な民族からなる「地方的世界」という姿は、タイの東北部や中部のように、主にタイ系と中国系の住民からなる「地方的世界」とは異なった様相を呈している。

③ホーボン郡の農村部では人口の国際移動・移住が盛んである。南部の山間地の村落で調査をしたなかで、タイへの出稼ぎ者が非常に多いことが明らかになった。政変前の聞きとりでは、1戸あたり1.5人程度の出稼ぎ移住があるとのことであった。かれらは稼いだお金を家の改修などに充てるので、村落内の住宅は良好に整備されているように見えたが、村落には高齢者が多く、閑散とした雰囲気であった。もともと畑作や山仕事以外に有力な産業がないので、現在、様々な換金作物の栽培が試みられているものの、グローバル化のなかで、より多くの現金収入を求めて隣国タイに出稼ぎするようになったのであろう。こうして「地方的世界」は海外出稼ぎ者の送付により、彼らをも包摂しながら外延的に拡大し、僻地であるにもかかわらずグローバル化した「地方的世界」が創出される。ミャンマーの地理的・経済的・政治的な周辺部にある「地方的世界」とグローバル化の関係性が、そこには如実に示されている。

(3) 東南アジア大陸部の「地方的世界」を横断的に比較研究するため、以下のようなアプローチを創出した。

①タイを出発として東南アジア大陸部の地方社会を通観すると、村落(Village)—村落連合体(Village Group)—下位の地方単位(Lower Local Unit)—上位の地方社会(Upper Local Unit)という組織化の構造があることがわかる。つまり、まず村落があり、複数の村落が集合して村落連合体が形成される。つぎに、この村落連合体が複数集まって下位の地方単位が形成される。このなかには中心となる町が内包され、原初的な村落—都市関係が形成される。下位の地方単位は単なる村落社会以上の社会である。さらに、下位の地方単位が複数集まって、上位の地方単位が形成される。ここには中心なる地方都市が含まれ、本格的な村落—都市関係が展開する。

②それに従って各国の対応関係を示せば、下表ようになる。つまり、タイの村落連合体であるタムボン(tambon)は、ラオスのクムバーン(kum ban)、ミャンマーのチェューユワー・オウッス(kyay ywar aote hsu)、ベトナムのサ(xa:社)に相当する。同じく、タイの下位の地方単位であるアムプー(amphoe)は、ラオスのムアン(muang)、ミャンマーのミョーネー(myot nal)、ベトナムのフエン(huyen:県)に対応する(以下、省略)。つまり、言語が異なるので名称は異なるが、東南アジア大陸部を横断して、地方社会の共通の組織化がみられる。各国では現地語の英訳も使用されているが、各国で独自に訳語を当てたこともあり、英語表記によってかえって比較は困難になっている。たとえば、村落連合体レベルの英訳は、タイではsub-district、ラオスではvillage cluster、ミャンマーではvillage tract、ベトナムはcommuneである。これらの英語から共通する社会単位を連想することは不可能であろう。これに対しては、すでにある日本語の用語を対応させればよいとの考えがあり、本報告書でも、郡や県については使用してきたが、とくに村落連合体レベルの日本語表記については研究者での共通理解はないので、比較研究では「村落連合体」という用語を使用するのが当面は適当であろう。

③「地方的世界」との関係で言えば、下位の地方単位は基礎「地方的世界」、上位の地方単位は拡大「地方的世界」と呼ぶことができる。下位の地方単位は地方社会の人々にとってもっとも身近な「地方的世界」であり、同時に村落と都市という異なる性質の社会を原初的に内包しているからである。現代では拡大「地方的世界」の重要性が増しているが、分析という視点からは、

まず基礎「地方的世界」に注目する必要がある。

|          | 村落<br>Village          | 村落連合体<br>Village Group        | 下位の地方的世界<br>Lower Local Unit | 上位の地方的世界<br>Upper Local Unit |
|----------|------------------------|-------------------------------|------------------------------|------------------------------|
| Thailand | mu ban (or ban)        | tambon                        | amphoe                       | changwat                     |
| (英訳)     | village                | sub-district                  | district                     | province                     |
| Laos     | ban                    | kum ban                       | muang                        | khwaeng                      |
| (英訳)     | village                | village cluster               | district                     | province                     |
| Myanmar  | kyay ywar              | kyay ywar aote hsu            | myot nal                     | kha rine                     |
| (英訳)     | village                | village tract                 | township                     | district                     |
| Vietnam  | lang or thon (村)       | xa (社)                        | huyen (県)                    | tin (省)                      |
| (英訳)     | village                | commune                       | rural district               | province                     |
| Japan    | ku (区) or<br>mura (ムラ) | son (村) or<br>gyosei-son(行政村) | gun (郡)                      | ken (県)                      |
| (英訳)     | natural village        | administrative village        | district                     | prefecture                   |

注) ベトナムは、岡江恭史「ベトナムの『自治村落』と農民組織」(『村落社会研究ジャーナル』42、2015、16 頁などを参照。

④このアプローチは、日本の農村社会学、とくに鈴木榮太郎『日本農村社会学原理』1940 年にも依拠している。鈴木は自然村論を論じるにあたって、「村の精神」といった規範的観念的な側面とともに、農村社会における集団の累積をいう客観的実証的に把握できる事実も重視した。この観点から、集団の累積の場として、第一社会地区(近隣)、第二社会地区(村落)、第三社会地区(行政村)を設定した。鈴木自身は直接には論じなかったが、彼の理論を敷衍すれば、下位の地方単位=基礎「地方的世界」とは「第四社会地区」に他ならない。つまり、鈴木其自然村論がヒントになって、東南アジア大陸部の「地方的世界」の横断的な把握が可能になる。

(4) 本研究の進行中に相次いで生じた新型コロナウイルスのパンデミック、ミャンマーの政変、さらにロシアによるウクライナの軍事侵攻という事態は、従来のグローバル化を見直す契機となりうる事象でもある。このため東南アジア大陸部のグローバル化と「地方的世界」の関係の再検討を行い、以下のような認識を得た。また、その検討にもとづいて新しい研究計画を科研費に申請し、令和 5 年度に採択された(課題名「東南アジア大陸部内陸域における<21 世紀時代>と『地方的世界』の創成」基盤研究 B、令和 5 年度~令和 8 年度)。

① 今後は、グローバル化による「地方的世界」の変化を受動的に解明するだけでは不十分である。グローバル化がもたらす変化を受けつつも、そのグローバル化を相対化し、乗り越えて「地方的世界」はいかに発展するかという視点が必要である。この間のグローバル化のなかで進んだ民主化などは「地方的世界」の発展にとって貴重な経験であり、後戻りがあり得ないことは言うまでもなからう。つまりそれらを踏まえて、新しい世紀(21 世紀)の立場から、ポストグローバルな「地方的世界」とは何かを究明することが求められる。

② 東南アジア大陸部は中国と陸続きで接し、中国から直接に大きな影響をうける。それは歴史上で断続的に生じてきた事象だが、現在は、グローバル化とオーバーラップしながら、東南アジア大陸部固有の「グローバル化」を生み出している。つまり、中国からの人・モノ・カネ・情報の大きな流れによって社会、そして「地方的世界」が変化している。たとえばラオスでは、昆明からビエンチャンを結ぶ高速道路の開通で沿線の「地方的世界」が一変しつつある。またミャンマーにおける中国のプレゼンスや関与はこの間一貫して顕著であり、ミャンマーにとって中国は最も影響のある国という立場にある。この中国主導の「グローバル化」のなかで、東南アジア大陸部の「地方的世界」は今後どうあるべきかが問題にならう。

③ 東南アジア大陸部の「地方的世界」からは、出稼ぎや国際結婚の移動・移住者が数多く送出される。東南アジア内部への移動・移住も多いが、同時に日本や韓国、さらに欧米等への移動・移住も盛んである。日本では、かつては中国からの出稼ぎや結婚流入が多かったが、現在は東南アジアからのそれにシフトしている。これらの移動・移住者は出身の「地方的世界」との関係を断絶することなく、長期にわたって関係を維持し、相互扶助を行う。さらに近年のネット社会の発達のおかげでは、「地方的世界」の居住者と他出者は SNS 等を通じて日常的に交流し、ネット上で日常を共有できる。「地方的世界」は国境を越えて拡大し、ローカルはグローバルと融合している。このような 21 世紀の時代において「地方的世界」はどこへ進むのかを探究する必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>藤井 勝                                 | 4. 巻<br>57          |
| 2. 論文標題<br>書評・高橋昭雄『ミャンマーの体制転換と農村の社会経済史』東京大学出版会 | 5. 発行年<br>2022年     |
| 3. 雑誌名<br>村落社会研究ジャーナル                          | 6. 最初と最後の頁<br>25-26 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                  | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難         | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

|                                  |
|----------------------------------|
| 1. 発表者名<br>藤井 勝                  |
| 2. 発表標題<br>現代タイにおける「地方的世界」と村落の展開 |
| 3. 学会等名<br>日本村落研究学会第67回大会        |
| 4. 発表年<br>2019年                  |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>藤井 勝                                  |
| 2. 発表標題<br>東北タイにおける「郡」社会の生成と展開：「地方的世界」視点による事例の考察 |
| 3. 学会等名<br>社会経済史学会東北部会研究会（2020年2月1日，東北大学）（招待講演）  |
| 4. 発表年<br>2020年                                  |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Masaru Fujii and Tang Tang Aung  |
| 2. 発表標題<br>“Local World” in Thailand and Myanmar: A Basic Approach  |
| 3. 学会等名<br>Seminar on Contemporary "Local World" in Mainland Southeast Asia (5th March 2023, Rubino Kyoto Horikawa) |
| 4. 発表年<br>2023年   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Monchai Phongsiri  |
| 2. 発表標題<br>Mobility of Isan People: Case Study of Mahasarakham Province, Thailand                                   |
| 3. 学会等名<br>Seminar on Contemporary "Local World" in Mainland Southeast Asia (5th March 2023, Rubino Kyoto Horikawa) |
| 4. 発表年<br>2023年   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Yasuhiro Takai   |
| 2. 発表標題<br>Changes in Socio-economic Life and Local Communities in the Urban-Rural Areas of Northern Laos           |
| 3. 学会等名<br>Seminar on Contemporary "Local World" in Mainland Southeast Asia (5th March 2023, Rubino Kyoto Horikawa) |
| 4. 発表年<br>2023年   |

〔図書〕 計1件

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>藤井勝・平井晶子編                        | 4. 発行年<br>2019年 |
| 2. 出版社<br>昭和堂                              | 5. 総ページ数<br>368 |
| 3. 書名<br>外国人移住者と「地方的世界」－東アジアにみる国際結婚の構造と機能－ |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)              | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|-------|--|-----------------------|----|
| 研究協力者 | ポーンシリ モンチャイ<br><br>(Phongsiri Monchai) |                       |    |

## 6. 研究組織（つづき）

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)        | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|-------|----------------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | タンタン アウン<br><br>(Tang Tang Aung) |                       |    |
| 研究協力者 | 高井 康弘<br><br>(Takai Yasuhiro)    |                       |    |
| 研究協力者 | 多田 哲久<br><br>(Tada Norihisa)     |                       |    |

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

| 国際研究集会   | 開催年         |
|--|-------------|
| Seminar on Contemporary "Local World" in Mainland Southeast Asia (5th March 2023, Rubino Kyoto Horikawa) | 2023年～2023年 |

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関                 |  |  |  |
|---------|-------------------------|--|--|--|
| タイ      | コーンケン大学                 |  |  |  |
| ミャンマー   | ミャンマー-日本・人材開発センター (MJC) |  |  |  |